

第 13 回山のトイレを考えるフォーラム開催にあたって

山のトイレを考える会・代表 岩村和彦

フォーラム参加の皆様にとって平成 23 年度はどんな年だったでしょうか。

忘れもしない昨年 3 月 11 日を皆様は家庭で職場で、或いは雪山の中だと、それぞれの状況の中で迎えていたことと思います。

私事ながら沢登りの他に全国の鉄道に乗るという趣味の延長線で本州の鉄道に乗りに出かけ、3 月 11 日午後 2 時 46 分を紀伊半島は南紀白浜の海岸露天風呂で迎えておりました。あわてて駆け付けた管理人に促され海岸を後にして J R 白浜駅に戻り、結局その夜は大勢の観光客と共に駅での雑魚寝を強いられました。その後の震災の状況は皆様ご存知の通りです。4 月、会社に無理を言って休暇を取り、微力ですがガレキの片付けに出向きました。目の前の悲惨な状況には言葉がありませんでした。

さて一見当会の活動とは無関係に思うこの大震災ですが、二次的三次的な意味では決して影響がないとも思えません。今後数十年に渡って続く膨大な復興支援やそれに伴う費用などが公的な山岳環境保護活動にも影を落とすのではないかと懸念を覚えます。優先順位としてみればこれは仕方のないことかもしれません。

震災に続いて夏場の大雨での林道決壊や、例えば日高幌尻岳への専用バスの運行などでの山荘宿泊者の減少で、結果し尿問題に皮肉にも好影響を及ぼしたという事実をどう捉えるべきなのでしょう。地元の経済事情も含めて議論したいものです。

これらの状況の中でますます重要性を帯びてくるのが、ボランティアの活動です。当然ながら当会もその一翼を担い、山岳環境保護へ貢献できることを願っているものです。

今年も第 13 回目のフォーラムを迎えることができました。多くの皆様のご支援があつてこそこの開催であることに心よりお礼を申し上げます。また類まれな研究者や熱心な協力者のお蔭で今回も充実した資料集が出せますことを誇りにも思います。

今年のテーマは「北海道の山トイレ 今私たちにできること」です。今回は従前のような講演形式はとらず、全道各地で地道ながら活動を続ける皆様の生の声を聴き、今後の活動の一助にできれば、と願っています。

昨年の活動状況については次ページ以降に書いてある通りです。黒岳バイオトイレのおがくずかき出しに会員が協力しています。トイレ問題の救世主とも思えたバイオトイレも厳しい山岳環境と、許容量と使用頻度との兼ね合いの中で多くの問題点が浮き彫りになっています。厳しい財政状況もあつて今後の維持管理をどうして行くかは主体者のみならず、利用者全員が共通の課題として認識し、行動することが必要です。

私達の次の世代、また次の世代へとこの北海道の素晴らしい大自然を引き継いでいくことが私達の責務であり義務であることを最後に再確認したいと思います。